勝利の伝説シェブロンラインは最高級品の証。

"Chevron-Line" ist der Beweis höchster Qualität.

勝利をめざすなら、選ぶべきだ!

——無言の威圧感を与えるヒュンメル——

DOUBLE SCORE

総発売元 株式会社ダブルスコア/総代理店 大松貿易株式会社
大阪市南区難波新地3-27プリンスビルB1 〒542 TEL. (06) 213-6646

アジア競技大会初参加に想う

30年待ちつづけたこの感動

（財）日本協会専務理事　荒川清美

2つ目の悲願成就

インドの首都デリー市における第9回アジア競技大会の開幕まで、あと僅かになった。

待ち遠しい、実に待ち遠しい。ハンドボール・マンにとっては、実に30年間も待ちつづけたアジア大会なのである。

いまでこそ、ハンドボールといえば全世界的なスポーツになっているが、第1回のアジア競技大会が開かれた一九五〇年代前期は、ヨーロッパのスポーツの域を出なかった。

国際ハンドボール連盟のメンバーで、ヨーロッパ以外の国といえば、日本、アルゼンチン、ブラジル、イスラエルの4ケ国を数えるだけ、とてもアジア大会どころではなかったのである。

それが、一九七〇年代後期からアジア地域でも、続々とハンドボールに親しむ国が生まれ、ついにアジア大会競技に加わるまでの成長を示したのだ。感無量である。

私をはじめ、古くからのハンドボール・マンは、オリンピックとアジア大会とユニバシアードの正式競技に、ハンドボールが加えられることが悲願である。

このうちの2つを実現できたことの嬉しさは、格別なものがあり、全ハンドボール愛好者とともに、この喜びを分かちあいたい。

アジア大会に、ハンドボールが加えられることが決まったのは、一九七四年のテヘラン大会時に開かれたアジア競技連盟総会（評議員会）である。

順当なら七八年のバンコク大会で実施されたであろうが、タイにハンドボール協会が設立されていず、見送られた。

日本のハンドボール関係者にとっては、新たな生みの苦しみを感じさせたものだ。

今回の採用までの道のりも、けして平たんではなかった。

インドのハンドボール組織が、もう一つ、未成熟で、いちぢは不採用の色さえ濃かった。

そのニュースが、機関誌で報じられるたびに、多くの人から、心配そうな問合せをいただいたが、歯がゆいことながら、どうすることもできなかった。

そんな折、強力な推進者が、日本の協力を求めてきた。

クウェート　シェイク・ファイド・アル・アハマド・アル・サバハ侯（以下、アル・サバハ会長と記述）である。

同侯は、クウェート国王の実弟で、クウェートハンドボール協会々長から初代アジア・ハンドボール連盟会長になったかただ。

七四年、アジア大会競技にハンドボールを加えた〝原動力〟であり、アジア・ハンドボール連盟旗上げの中心的役割りを果たした実力は、正直のところ、私も、舌を巻いていたが、あくことなき意欲は、次の目標を、デリー大会実施に据えていたのだ。

オリンピック採用以上の感激

30年近く〝この日〟をを待っていた私――いや日本ハンドボール界に反対のあるわけはなかった。

アル・サバハ会長に全面協力を打ち出す一方、私も、日本オリンピック委員会内で、アジア、スポーツ界に詳しいかたたちに「デリー大会でハンドボールを」と説いてまわった。

昨年2月、クウェート国際の時アル・サバハ会長と面談したが、「デリー大会の種目に加える」ことへの熱弁は、想像を上廻るものがあり、この人がいる限り、採用されるのはまちがいない、とさえ思わせる迫力であった。

はたして、デリー大会にハンドボールは滑りこんだ。

今春4月のアジア・ハンドボール連盟理事会で、同会長は、私に握手を求めながら「我々の努力の大成果だ」といってくれたが、私も、ミュンヘン・オリンピック採用の決まった時以上の感激にひたったものである。

思えば、アジア・ハンドボール界は、よくここまで発展した。

そして、一九三〇年代から、活動をつづける我が日本協会が、アジア発展の大きな礎（いしずえ）になっていることに、いささかの自負を覚える。

過去8回、各競技の活況を横目でみながら、くちびるをかんで過ごした諸先輩や競技者、愛好者諸賢の努力に、改めて敬意と謝意を示すとともに、今回の参加を、大声でご報告したい。

限りなき前進を

ところで、今大会の参加国は、日本を含め12ケ国のフルエントリーと伝えられる。

半年前、実施要領が発表された際、はたして12ケ国もの参加が果されるかどうか、懸念されたが、

エントリーを〆切ってみると、まったくみごとにこの数が〝的中〟した。

これまでの世界選手権予選やオリンピック予選からすれば、これほどの〝大量参加〟は考えられぬもので、それだけ、アジア諸国がこの大会での実施を待ち望んでいた。ということにもなるだろう。

アジア・ハンドボール界の競技力向上も、近年、特筆される。

残念な例を抽き出すことになるが、七六年のモントリオール・オリンピックで5位入賞を果たした日本女子は、すでにナンバー・ワンの座を韓国にあけわたし、中国の急迫も鋭いものがある。

男子も、日本の独走時代は過ぎ韓国、中国の充実、中東、アラブ勢の進境によって、伯仲の時代を迎えようとしている。

日本ハンドボール界の成果と努力が、アジア諸国のターゲットとなり、それがアジア・ハンドボール界のいっそうの発展に寄与するとするならば、これまた〝先輩国〟として誇るに足るものであろう。

もちろん、今回初参加する日本代表は、優勝を目指し、かつてない精進をつづけている。

このことは、私が、一昨年、強化関係者に要望した「まず、アジアの王座確保に全力を」（注・本誌188号参照）の実証であり、あの成功を祈ってやまない。

今後、アジア・ハンドボール界の角逐は、激しくなりこそすれ、厳しくなりこそすれ、一試合たりとも安閑とすることは許されなくなろう。

今回のデリー大会は、その口火なのである。

今回が、アジアの激斗の火ぶたを切る大会になるのである。

また、そうなってこそ、アジア大会に加ったた意義があり、その場で勝ち進んでこそ、王者としての真価を得られるのであろう。

アジア大会の実施によって、アジア・ハンドボール界の、ますますの結束が企てられることも、大いに期待したい。

実のところ、アジアは地域的に横に広いため国際関係は複雑だ。

今大会終了後、現地で、これらの問題に対処するアジアの新しいスポーツ組織がスタートすることにもなっているが、ハンドボール界が、こうした問題をさけずに通れないのも事実である。

これまでの各国の交流は、いわば散発的、わずかに2回のアジア選手権（77年クウェート、79年ナンキン、いずれも日本優勝）が、交歓の場として設けられていたにすぎない。

「限りなき前進」のスローガンのもとに集るアジア大会は、今までとは比べものにならぬほど、アジアのハンドボール・マンの親密さを増すことになるだろう。

そうした友好の場のなかで、当面する諸問題を話し合い、アジアハンドボール界一本の突進のために協力を誓い合えるなら、過去8回30年間不参加の遅れを、一気に取り戻すことにもつながると思う。

ともすれば、オリンピックより低く考えられ勝ちなアジア大会だが、その意義においては、優るとも劣らぬものがあり、とりわけ、日本ハンドボール界にとっては、オリンピック定着後、アジア大会に加った配剤の妙を、かみしめる必要があろう。

全国ハンドボール愛好者諸賢が改めて、アジアのスポーツ界、アジアのハンドボール界に深い関心を寄せられるよう切に望むものである。

アジアの情勢

国名	今大会出場	AGF加盟	IHF加盟	AHF加盟
日本	○	○	○	○
バーレーン	○	○	○	○
中国	○	○	○	○
インド	○	○	○	○
イラク	○	○	○	○
イラン	○	○	○	○
韓国	○	○	○	○
クウェート	○	○	○	○
カタール	○	○	○	○
サウジアラビア	○	○	○	○
シリア	○	○	○	○
アラブ首長国連邦	○	○	○	○
ホンコン		○	○	○
レバノン		○	○	○
シンガポール		○	○	
朝鮮民主々義人民共和国		○	○	○
バングラデシュ		○		
ブルネイ		○		
ビルマ		○		
インドネシア		○		△
ベトナム		○		△
アフガニスタン		○		△
マレーシア		○		△
モンゴル		○		
ネパール		○		△
パキスタン		○		○
フィリピン		○		
スリランカ		○		
タイ		○		
南イエメン		○		
イスラエル		○	○	
カンボジア		○		
ラオス		○		
台湾（中国台北）			○	
パレスチナ			○	○

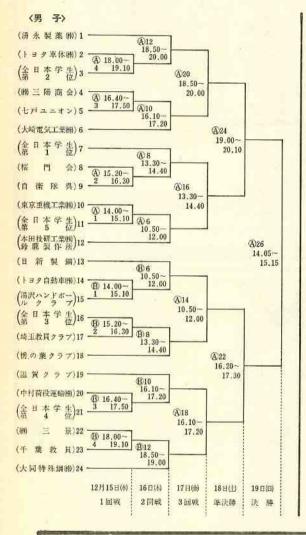
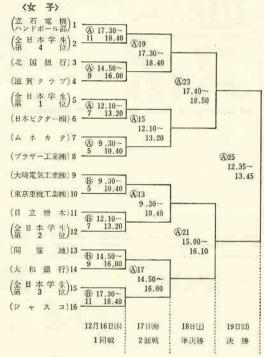
（注）AGF＝アジア競技連盟
IHF＝国際ハンドボール連盟
AHF＝アジアハンドボール連盟
△印＝未加盟ながらハンドボール実施

『ハンドボール』57年11月号（第213号）目次

【表紙写真】関東学生秋季リーグ戦に全勝で優勝を飾った日大
スポーツイベント社提供

第34回
全日本総合ハンドボール選手権大会
組合せ決まる

第34回全日本総合選手権大会は、12月15日から19日までの5日、東京の駒沢屋内球技場、駒沢体育館で開催される。

参加チーム数は、男子24、女子16で、その組合せ抽せんが、11月15日、東京原宿の岸記念体育館四〇一号室で行なわれ、以下のように決定した。

注1．Ⓐ Ⓑ 共、松ヤニ使用不可
2．全日本学生選手権12/1～12/5のため、本組合せは、「第1位」の如く、夫々表示しました。
3．女子13、「開催地」は、全日本学生選手権の結果によるので、「開催地」と表示しました。

Ⓐ＝駒沢屋内球技場
Ⓑ＝駒沢体育館

THE HEALTH TREE CREATES A HAPPY LIFE

キヨーレオピン
LIQUID
レオピン
ファイブ

Victor
"HIS MASTER'S VOICE"
20 Victor
ハンドボールごころを満たす
NETWORK

第7回日本リーグ総評

蒲生君おめでとう

日本ハンドボールリーグ
運営委員長　安藤　純光

　昭和57年度、第7回日本ハンドボールリーグは、去る11月7日の名古屋市体育館での大同×湧永、大崎×ブラザー戦をもって前期4週10日、後期4週8日間にわたる全日程を終了し閉幕した。

　男子の部では、今回もまた大同×湧永戦がタイトルを決する重要なカギになった。リーグ開幕前湧永優勢が伝えられていたが、大同はこれを覆して前期最終日の広島での対戦に20－17と先手をとった。後期開幕を前にしての「国びき国体」の決勝戦の対戦では16－15と湧永が優勝し、湧永は後期リーグの対戦に期待をつないだ。しかし、大同は最終戦で20－18と勝利し10戦全勝で第7回日本ハンドボールリーグ5年連続6度目のタイトルを手中におさめた。これで第7回までの両チームのリーグでの対戦は、大同の6勝4引き分け2敗と、大同が大きく水をあけた。最終戦を終ったあと「どうもリーグでは、湧永は勝てないな！」というささやきも聞えてきた。大同はベテラン蒲生がチームをよくリードし、自らもエースとしての充分な活躍を果たし、栄冠獲得の原動力としての働きは面目躍如たるものがあった。一歩およばずまたしても2位となった湧永には、ささやきが「声」にならないように来期の奮起を期待したい。

　日新、大崎、本田は、それぞれ1勝の差が順位を決している。日新の今期の活躍は、特筆すべきものがあり、リーグを盛り上げた。大同、湧永に敗れたとはいえ僅少差であり、西山の成長もあって5勝5敗の星を残し3位の座を獲保した。来期に大きな期待が持てる。3年間2部リーグに甘んじた大崎は、念願の1部復帰を果たし、3年間の苦労が実り4勝をあげて4位となった。二強の前に立ちはだかる一番手として期待された本田の今期の凋落ぶりはどうしたことか。わずかに3勝、5位は腑甲斐無い。来期の復調を期待する。イーグルスは、ついに白星をあげることができなかった。補強が思うにまかせないイーグルスとしては、他チームにないさまざまな障害や苦労があると思われるが、特異な存在として、リーグ発展のために一層の奮起を期待したい。

　女子の部に目を移すと、ともに外国籍プレーヤーを加えた立石×大崎戦の行方がタイトルを決した。K・イレッシュ、V・ドルベェニャクの二人のユーゴからの助っ人もようやく、チームになじんで、もてる力を発揮し、対大崎戦を除いては各チームに対して安定した力をもってリーグを戦い、3年連続4回目の栄冠を手にした。大崎もまた2年目を迎えた二人の助っ人、李相玉、李京姫の期待通りの活躍によって11月3日の熊本での対立石勝まで無敗、このゲームがまさに雌雄を決する一戦となったが、わずかに及ばず一敗を契し初優勝の望みがならなかった。ジャスコは前期を終って無敗、「国びき国体」に優勝してこの勢いを駆って後期も乗りきるかと思わせたが、立石、大崎に敗れ3位となった。ブラザーは上位チームに力およばず敗れたが4勝3敗、4位Aクラスを守った。ビクター、日立大和の順位あらそいは熾烈であった。ともに上位4チームからはなれて2勝5敗と大きく負け越し、わずかに得失点差によって5、6 7位を分けあった。北国はついに白星をあげることができなかった。総得点102点に対して総失点が202点という結果では、好成績を望むことはできない。来期の健闘を期待したい。

　さて、第7回リーグを終って、特筆すべきは蒲生晴明君（大同）のリーグ個人通算最多得点が527点に達したことである。前期を終って488点、当面の目標500得点を達成することは時間の問題となった。後期初戦の10月17日対大崎戦（朝霞市総合体育館）で待望の大記録500得点を達成した。蒲生君のリーグへの参加は第2回からであり、6年63試合を戦い527得点、一試合平均8.4得点したことになる。大同のエースとしてだけではなく、日本ナショナルチームの主力として活躍中であり、この記録はさらに更新されるであろう。この前人未踏の大記録（――2位は327点の佐藤要二君（本田技研監督）――に対し、最大限の敬意とお祝いを申しあげるとともに今後の健闘を祈る。同じく女子の部では西典子さん（大崎）は、通算219得点をあげ、来期もまた大崎のリーダーとしてリーグに登録し記録更新が期待される。

〝ファンの皆様へ〟

　第7回日本ハンドボールリーグも皆さんの盛大なご声援をいただき全日程を終了致しました。ありがとうございました。目下第8回の準備を進めております。ますますのご支援とご声援をお願い申しあげます。

第7回日本リーグ

大同特殊鋼(男) 立石電機(女) が無敗で制覇

第7回日本リーグ後期リーグ戦は10月7日から11月7日まで男女とも熱戦をくり広げた。男子は、大同特殊鋼、湧永製薬の二強が後期も無キズのまま最終戦に対決、接戦ながら大同が前期につづいて湧永を破り、10戦全勝で5年連続6回目の優勝。女子は、立石電機がライバルの大崎電気、ジャスコを降し7戦全勝で3年連続4度目の優勝を飾った。尚、今季リーグで男子では蒲生晴明(大同)が500ゴール、女子では西典子(大崎)が200ゴールという立派な個人記録が誕生した。

男子

<第1週第1日>

▽10月17日(日)朝霞市立総合体育館(埼玉)

大同特殊鋼 35(17-8 18-10)18 大崎電気
(6勝) (2勝4敗)

○…前期リーグを終えて500ゴールまであと"12"に迫っていた大同のエース蒲生が、後期開幕戦のこの試合、後半6分30秒に遂に偉大な記録を達成した。

5年連続のリーグ制覇に燃える大同は、500ゴールに挑む蒲生が立ち上がりから意欲的に打ち、前半で1人で8ゴールをあげる活躍を見せ、17-8と前半で大差をつけて勝負を決した。

▽同・奥武山体育館(沖縄)

日新製鋼 22(9-6 13-10)16 本田技研鈴鹿
(3勝3敗) (2勝4敗)

○…前半相方のGKの活躍が目立つ。15分まで4-1と日新リード。西山はマンツーマンされる。15分過ぎより本田が三本松のカットインや猪野の倒れ込みによる活躍で20分過ぎには6-4と逆転。しかし、日新もすぐに反撃、脇若、吉見、泉、西山が着々と得点9-6と再度リードを奪って前半終了

本田も後半、尾上、三本松などが反撃に出たが、日新の吉見、西山の緩急自在の活躍に押し切られた。

<第2週第2日>

▽10月24日(日)高松市民文化センター別館(香川)

湧永製薬 34(19-9 15-10)19 大阪イーグルス
(5勝1敗) (6敗)

○…前半25分過ぎまではほぼ互角に戦っていたが、湧永が一気に8点連取、前半を19-9とリードして折り返す。

後半に入っても湧永のペースは崩れず、終始リードを守った。大阪イーグルスもよく走り健闘したが、力の差が出た試合であった。

▽同・高岡市民体育館(富山)

日新製鋼 21(13-8 8-11)19 大崎電気
(4勝3敗) (2勝5敗)

○…前半、日新が西山、高木のシドル、ロングでリード。一方、大崎は斎藤、東江のカットイン、ポストなどでくい下がる。

後半は追いつ追われつのゲームから、大崎は連続得点により追い上げ、残り1分で2点差としたが及ばなかった。

▽同・境港市民体育館(鳥取)

大同特殊鋼 24(11-9 13-6)15 本田技研鈴鹿
(7勝) (2勝5敗)

○…大同は蒲生がマンツーマンを受け苦しい戦いだが、大原、柳川実の頑張りで得点し、一方本田もGK・大畑の好守と長野、佐々木、三本松らが加点し、前半11-9と大同の2点リードで終了。

後半に入るとやや疲れの見える本田はミスが多く、立上り大同が5連続ゴールし主導権を握り、そのまま押し切った。

<第3週第1日>

▽10月30日(土)大阪市中央体育館(大阪)

大同特殊鋼 39(16-7 23-9)16 大阪イーグルス
(8勝) (7敗)

○…滑り出しから大同・田口が打ちまくり、大原、柳川らが走り回って着々加点。一方イーグルスは辻本、源野が散発的に得点するのみで攻めあぐみ前半16-7と大同の大量リードで終了。

後半に入っても大同は手綱を引き締めてメンバーチェンジはするものの戦力を維持して最後までそのスピードは落ちずに圧勝した。

▽同・京都府立体育館

湧永製薬 22(9-10 13-11)21 日新製鋼
(6勝1敗) (4勝4敗)

○…日新の野望は、後半28分30秒、ダブルスカイプレーの失敗を速攻につなげられて消え去った。

開始3分間に日新の西山が3連続ゲットで3-0、7分には5-1。もしや…の期待感を抱かせる展開となったが、湧永も反撃、21分に7-7とようやく同点、以後一進一退のシーソーゲームとなって観客を湧かせた。

この間湧永のPT失敗(3本)リバウンドなど日新はツキにも恵まれていたが、ディフェンスの潰しの甘さをつかれて後半22分、17-20と3点差になったときはもはやこれまでかと思われたが、高木泉、森が粘って28分、20-20と再度同点、緊迫してきた。このゲームの全てを残り2分に凝縮して両チーム白熱したが、湧永のベテラン藤本に立て続けに決められ、日新の野望が消えた。

西山、高木、森らの若さとパワーを引き出しつつ最後まで湧永を追いつめた日新の粘りは今後大い

に楽しみになってきた。

▽同・石川県立体育館（石川）

大崎電気 22（10－11 12－7）18 本田技研鈴鹿
（3勝5敗）（2勝6敗）

○…前半2分過ぎ、大崎が斎藤により先行。その後も斎藤の活躍で、前半12－7と大崎リードで終了。

後半に入っても両チーム突破口が見つからず、一進一退の展開。結局、前半の〝貯金〟で大崎が逃げ切る。

本田では、猪野の若い力あふれるプレーが目についた。

＜第3週第2日＞

▽10月31日（日）神戸市立中央体育館（兵庫）

日新製鋼 39（21－7 18－10）17 大阪イーグルス
（5勝4敗）（8敗）

○…前半、個人技に勝る日新はポストプレー、速攻から着実に得点、イーグルスGKも懸命に守ったが、日新のスピードにはどうする事も出来なかった。

後半に入っても日新のスピードあふれるパスワークは衰えず、確実に加点その差をひろげていった。

全員が打てる日新と辻本1人のイーグルスでは、始めから勝負は決っていたといえよう。

湧永製薬 27（13－10 14－8）18 大崎電気
（6勝1敗）（3勝5敗）

○…前半、大崎はよく走りパスワークよく2連続得点したが、湧永も速攻、ペナルティーで8連続得点、大崎はその後15分間よく走りシュートチャンスもあったが、GK井藤の好守に阻止され大差をつけられた。津川、穂積の両ベテランと池ノ上のシュートが光った。

後半に入り大崎こまねずみ戦法は増々熱気を帯び、一進一退の好ゲームとなった。大崎の斎藤、長野、松岡も全力を出し尽したが、大型チーム湧永を崩すのは至難のワザであった。点差こそ開いたが最近まれに見る好ゲームであった。

＜最終週第1日＞

▽11月3日（祝）日新製鋼呉体育館（広島）

大同特殊鋼 20（12－7 8－10）17 日新製鋼
（9勝）（5勝5敗）

○…試合開始後4分まで両チームとも動きが堅く無得点。5分、大同が先取するや一変して激しい展開となり、大同・蒲生と日新・西山との点の取り合いとなった。西山の8連続ゴールで日新が2点リードして前半終了。

後半は蒲生が連続ゴールして同点とし、一進一退の好ゲームとなったが、西山がマンツーマンにつかれてから加点できず、3点差で大同が逃げ切った。

▽同・熊本県立総合体育館（熊本）

湧永製薬 26（13－9 13－10）19 本田技研鈴鹿
（8勝1敗）（2勝7敗）

○…後半に入り3点差の攻防が14分までつづいたが、4点差、5点差と次第に点差が広がった。

湧永は出来としては良くなかったが、本田がその壁をもう一つ突き破れなかった。穂積、粟屋の安定したシュート力が光った。

▽同・相模原市立総合体育館（神奈川）

大崎電気 25（12－10 13－10）20 大阪イーグルス
（4勝6敗）（9敗）

○…前・後期通算して勝ち星のないイーグルスは、立ち上がり先取点をあげリードしたが、18分過ぎ頃大崎に同点に追いつかれ、13－10と点のリードを許して前半を終了。

後半に入ってから大崎が終始リードを奪い、イーグルスも追いあげたが辻本1人に頼るだけで及ばなかった。

＜最終週第2日＞

▽11月6日（土）四日市体育館（三重）

本田技研鈴鹿 28（18－9 10－10）19 大阪イーグルス
（3勝7敗）（10敗）

○…立ち上がりイーグルスは大西をフリーディフェンスにし、相手攻撃を乱す戦法が功を奏し、中盤までリード。本田も個人技で挽回、シーソーゲームとなり10－10の同点で前半終了。

後半、本田はコンビがとれ始めコンビネーションからのロング、カットイン攻撃と多彩な攻撃で一方的リードとなる。イーグルスもよく頑張ったが、体格によるハンディをカバー出来ず、本田GK・大畑の好守にも苦しめられて、遂に勝ち星なく今季リーグを終了した。

＜最終日＞

▽11月7日（日）名古屋市体育館（愛知）

大同特殊鋼 20（10－9 10－9）18 湧永製薬
（10勝）（8勝2敗）

○…蒲生の豪快なフリースローで始ったこの試合は、終始大同が先手を取り快勝した。

大同は、固いディフェンスで湧永の攻撃のリズムを分断し、攻めては早い展開から蒲生、田口のロングを生かすかと思えば、柳川、中本らのポストでの巧技を織りまぜて得点を重ねた。一方、湧永は大同GK・上村に大事なところでシュートを阻まれ、今一つリズムがかみ合わないままに終わった。

〔個人表彰〕

▽ベストセブン

GK　上村幸彦（大同特殊鋼）
FP　蒲生晴明（大同特殊鋼）
　　田口勝利（大同特殊鋼）
　　池ノ上孝司（湧永製薬）
　　西山　清（日新製鋼）
　　長野　透（大崎電気）
　　辻本孝仁（大阪イーグルス）

▽最多得点

西山　清（日新製鋼）56点

女子

＜第1週第1日＞

▽10月17日（日）朝霞市立総合体育館（埼玉）

大崎電気 28（14－11 14－9）20 ジャスコ
（4勝）（3勝1敗）

○…大崎すべり出しよく速攻でリード、李相玉のリードから李京姫のロング、フェイントとシュートが決まる。両チームGKが再三のピンチを防ぐ。

ジャスコをは辻本、横山がよく健闘した。

▽同・奥武山体育館（沖縄）

大和銀行 20（12—6 / 8—10）16 北国銀行
（2勝2敗）　（5敗）

○…前半おたがい堅さの見えた両チームであったが、8分すぎ大和若水の速攻2連取から大和ペースで終了。後半北国八木の活躍で15分すぎ2点差までつめるも、2本のPT失敗等がひびき結局大和の逃げ切りで終了した。

＜第2週第2日＞

▽10月24日（日）高松市民文化センター別館（香川）

ジャスコ 17（8—8 / 9—8）16 日本ビクター
（4勝1敗）　（4敗）

○…迫熱した好ゲームを展開。互いに手の内を知りつくした同志で攻めあぐむケースが多かったが、両チームよく走り、前半を8対8で折り返す。後半に入っても、逆転につぐ逆転で盛りあがったが、25分過ぎに3点差をつけたジャスコが辛くも逃げ切った。

▽同・高岡市民体育館（富山）

立石電機 28（13—6 / 15—5）11 日立栃木
（4勝）　（1勝4敗）

○…立石電気薮田選手10点、木下選手10点と二人で7割をきめる。また11点がペナルティーによって決まった。日立はエース不在で、よく動いているが得点に結びつかず大敗する。

▽同・境港市民体育館（鳥取）

ブラザー工業 19（7—6 / 12—10）16 大和銀行
（3勝1敗）　（2勝3敗）

○…互いにこれと言った決め手がなく10分過ぎまで1対1。また互いにパスミスが目立ったがブラザーがうまく得点に結び7対3と前半20分まで引き離したが、残り5分で鈴木で、若水、若水と3連続ゴールし7対6で前半を終了した。後半15分で8対8とした大和だったが一度もリードすることなく、ブラザーが振り切った。大和のパス、シュートミスが残念だった。

＜第3週第1日＞

▽10月30日（土）大阪市中央体育館（大阪）

ジャスコ 22（13—9 / 9—8）17 大和銀行
（5勝1敗）　（2勝4敗）

○…前半21分まで大和の川添、秋成のロング、さらに馬渡の両サイドからのシュートが決まりシーソーゲームとなったが、秋成にマンツーマンがつかれるとジャスコの速攻ペースになり5点連取。後半両チーム速攻ペースでシーソーゲームになったが、各所にGKの好守があり観客を沸かした熱戦となった。結局前半の終りの連取が勝敗の分かれ目になった。

▽同・京都府立体育館（京都）

立石電機 33（18—9 / 15—10）19 ブラザー工業
（5勝）　（3勝2敗）

○…立石にとって京都は準ホームグラウンド、大応援団の声援にこたえてハツラツと走りまわって快勝した。立ちあがり、立石の外人カーヤの連続2本のポストシュートでスタート。カーヤの長身とリーチの長さに、ブラザーディフェンス陣は潰しきれず強引にねじ込まれた。以後ブラザーはずるずるとなすすべもなくリードを許していった。大量リードに一層調子をあげた立石は、後半若手を繰り出し速攻、カットイン、スカイプレー等自由自在にコート中を空色のユニフォームが駆けめぐった。

▽同・石川県立体育館（石川）

日本ビクター 25（14—6 / 11—11）17 北国銀行
（1勝4敗）　（6敗）

○…前半北国ミスが目立ち苦しむ。一方日本ビクターはよく走り、多彩な攻めを展開14—6と大きくリード。後半に入っても日本ビクター好調に攻めたてる。一方リズムをとりもどした北国銀行、八木を中心に懸命に追い上げるが及ばず。

＜第3週第2日＞

▽10月31日（日）神戸市立中央体育館（兵庫）

ブラザー工業 25（11—10 / 14—7）17 日本ビクター
（4勝2敗）　（1勝5敗）

○…前半両チームとも早いパスワークからミドルシュートを多用一進一退の展開となった。後半に入り同じ状態がつづいたが、両チームとも雑なシュートが目立ち始め、ドタバタゲームがつづいたがブラザーが確実にボールを回し、ポスト、サイド攻撃で得点したのに対し、ビクターは展開が悪く無理なシュートしか出来ずブラザーの速攻を許した。

▽同・栃木市総合体育館（栃木）

大崎電気 30（14—8 / 16—11）16 日立栃木
（5勝）　（1勝5敗）

○…開始3分日立が1点を先行したがすぐに大崎も返し、日立のGKの好守が光る中で互いに1点を争う激しいせり合い。11分過ぎ大崎の西がシュートを決め二百得点を記録。試合を一時中断して花たばを受ける。この西の記念のシュートあたりから大崎は日立を突き放し、その後も点を加えた。

後半も立ち上がり日立がよく健闘を見せたが20分以降パスミスが目立ち大崎に得点を許した。

＜最終週第1日＞

▽11月3日（祝）日新製鋼呉体育館（広島）

日立栃木 28（12—4 / 16—10）14 北国銀行
（2勝5敗）　（7敗）

○…前半2分、日立・栗原のカットインプレーで先行、大高のロングシュートと速攻で連続得点する。一方、北国銀行は八木ががんばったが、日立の高いディフェンスに阻まれ得点にならない。

後半も日立・前田の連取で得点を重ねた。

北国も後半追いすがったが、チーム力の差はどうしようもなかった。

▽同・熊本県立総合体育館（熊本）

立石電機 23（15—10 / 8—10）20 大崎電気
（5勝）　（5勝1敗）

○…立石・カーヤのはねかえりシュートの得点により、ポスト、ポストからのパスと5—0と点が開く。

西のシュート、李のシュート、ディフェンスの動きの良くなった大崎、中ば頃より互角の展開となった。

後半、大崎2点差まで詰め寄ったが、立石・木下がPTを決めて逃げ切る。

▽同・相模原市立総合体育館（神奈川）

日本ビクター 25（13－7／12－6）13 大和銀行
（2勝5敗）　　（2勝5敗）

○…第7回日本リーグもおしせまり各チームとも星勘定が難しくなって来た。ビクターも大和も下位を低迷し最終ゲームを迎えた。どちらも6位をかけたゲームであったが、ゲーム開始時からビクターの得点力が大和を上回り、時間の経過とともに差を開いた。
　勝敗とは別に得失点の差が順位を決することになるので、両チームとも最終まで力戦した。

＜最終週第2日＞
▽11月6日（土）四日市市立体育館（三重）

立石電機 22（11－10／11－8）18 ジャスコ
（7勝）　　（5勝2敗）

○…リーグ優勝のかかった対戦だけに立ち上かりから気迫のこもった好ゲームを展開、先手を取った立石がポストのカーヤをうまく使って前半11対－8とリード。
　後半に入ってジャスコはGK矢部の再三にわたる好守もあって懸命に追い上げ、12分には15対14とした。しかし、その後は立石の堅いディフェンスに攻めあぐみ苦戦、一方の立石は薮田、木下の好リードもあって多彩な攻撃で18分まで5点連取、20対14として勝負を決めた。

＜最終日＞
▽11月7日（日）名古屋市体育館（愛知）

大崎電気 23（14－8／9－11）19 ブラザー工業
（6勝1敗）　　（4勝3敗）

○…前半、大崎が李京姫で先取ブラザーも植田で同点、その後大崎の速いパスワークをプレスディフェンスで相手のミスを誘い速攻で加点するブラザー、追いつ追われつのゲームになる。前半17分、大崎・西のロングシュートが決まり日本リーグが得点新記録をつくる。
　後半にはいり大崎の攻撃のパスワークがよくなり、また、ブラザーの攻撃のミスを速攻に結びつけ8分に逆転。その後また追いつ追われつゲームとなったが、後半25分ブラザーのディフェンスに疲れが見られ荒いディフェンスになり杏原が退場させられ大崎にリードを許す。

〔個人表彰〕
▽ベストセブン
GK　矢部澄子（ジャスコ）
FP　木下智子（立石電機）
　　カティッア・イレッシュ（立石電機）
　　李　京姫（大崎電気）
　　杏原礼子（ブラザー工業）
　　八木千津子（北国銀行）
▽最多得点
　李　京姫（大崎電気）45点

第7回（昭和57年度）日本ハンドボールリーグ最終結果

男子	大同	湧永	本田	イーグルス	日新	大崎	勝	敗	分	勝点	チム間同点	得点／失点	差	順位
大同特殊鋼		○20−17 ○20−18	○22−15 ○24−15	○27−11 ○39−16	○27−16 ○20−17	○23−21 ○35−18	10	0	0	20		257／164	93	1
湧永製薬	×17−20 ×18−20		○24−14 ○26−19	○29−16 ○34−19	○24−19 ○22−21	○30−21 ○27−18	8	2	0	16		251／187	64	2
本田技研鈴鹿	×15−22 ×15−24	×14−24 ×19−26		○28−19 ○28−19	○24−23 ×16−22	×19−24 ×18−22	3	7	0	6		196／225	−29	5
大阪イーグルス	×11−27 ×16−39	×16−29 ×19−34	×19−28 ×19−28		×17−27 ×17−39	×19−20 ×20−25	0	10	0	0		173／296	−123	6
日新製鋼	×16−27 ×17−20	×19−24 ×21−22	×23−24 ○22−16	○27−17 ○39−17		○29−16 ○21−19	5	5	0	10		234／202	32	3
大崎電気	×21−23 ×18−35	×21−30 ×18−27	○24−19 ○22−18	○20−19 ○25−20	×16−29 ×19−21		4	6	0	8		204／241	−37	4

女子	立石	ジャスコ	大崎	ブラザー	日立	ビクター	北国	大和	勝	敗	分	勝点	チム間同点	得点／失点	差	順位
立石電機		○22−18	○23−20	○33−19	○28−11	○24−17	○31−14	○27−12	7	0	0	14		188／111	77	1
ジャスコ	×18−22		×20−28	○23−16	○24−18	○17−16	○36−9	○22−17	5	2	0	10		160／126	34	3
大崎電気	×20−23	○28−20		○23−19	○30−19	○24−19	○29−16	○27−15	6	1	0	12		181／131	50	2
ブラザー工業	×19−33	×16−23	×19−23		○26−15	○25−17	○33−16	○19−16	4	3	0	8		157／143	14	4
日立栃木	×11−28	×18−24	×19−30	×15−26		○14−13	○28−14	×18−19	2	5	0	4	2	123／154	−31	6
日本ビクター	×17−24	×16−17	×19−24	×17−25	×13−14		○25−17	○25−13	2	5	0	4	1	132／134	−2	5
北国銀行	×14−31	×9−36	×16−29	×16−33	×14−28	×17−25		×16−20	0	7	0	0		102／202	−100	8
大和銀行	×12−27	×17−22	×15−27	×16−19	○19−18	×13−25	○20−16		2	5	0	4	3	112／154	−42	7

第7回（昭和57年度）日本ハンドボールリーグ・二部最終結果

男子	三陽	中村	トヨ車	三景	大ガス	日鉄	セントラル	勝	敗	分	勝点	チム間同点	得点／失点	差	順位
三陽商会		○25−19	○38−23	○27−20	○35−15	○27−15	○36−18	6	0		12		188／110	78	1
中村荷役	×19−25		○30−19	×19−21	○21−12	○26−17	○34−20	4	2		8		149／114	35	3
トヨタ車体	×23−38	×19−30		×17−21	△25−25	○27−20	○29−19	2	3	1	5		140／153	−13	4
三景	×20−27	○21−19	○21−17		○22−20	○28−20	○29−16	5	1		10		141／119	22	2
大阪ガス	×15−35	×12−21	△25−25	×20−22		×17−23	○25−21	1	4	1	3		114／147	−33	6
日鉄建材工業	×15−27	×17−26	×20−27	×20−28	○23−17		○21−19	2	4		4		116／144	−28	5
セントラル自動車	×18−36	×20−34	×19−29	×16−29	×21−25	×19−21		0	6		0		113／174	−61	7

女子	ムネカタ	東京重機	勝	敗	勝点	得点／失点	差	順位
ムネカタ		×17−29 ×21−24	0	2	0	38／53	−15	2
東京重機	○29−17 ○24−21		2	0	4	53／38	15	1

第14回全日本自衛隊選手権大会

自衛隊日本一に呉（海・広島）が輝く

駒沢体育館

第14回全日本自衛隊ハンドボール選手権大会は、11月2、3、4日、駒沢体育館で開催された。

自衛隊日本一を競う男子選手権の部は、各ブロックの優勝もしくは、それに準ずるチームの参加で熱戦が繰り広げられ、呉（海・広島）が、5連覇を狙う常勝勝田（陸・茨城）を準々決勝で破り、その勢いに乗って決勝では、これも初進出の北熊本（陸・熊本）を下して堂々初優勝の栄冠を射とめた。

女子の部は、三宿中央病院（陸・東京）の看護婦さんチームが3連勝を飾り、少年の部では、陸・海・空の代表によって争われたが、熊谷生徒隊（空・埼玉）が初優勝し、壮年の部は、古河・勝田OBが2連勝した。

ところで、今回の大会を振り返ると、各種別の優勝を陸海空それぞれが仲よく分け合ったが、このことはただ単に各チームが所属する隊の名誉と威信を求めての戦いだけではなく、それ以外に、陸海空別の対抗意識の激しさの結果であり、自衛隊ならではのユニークな感があった。

その他、特に印象に残ったことは、少年の部でキラッと光る素質に恵まれた選手が活躍し、この選手達の成長とともに発展していくと考えられる今後のこの大会が、大いに楽しみである。

また、女子の部では、入隊してからハンドボールを始めた人が大半というのに、GKの攻守、FPの好プレーの連続で会場を大いに沸かせ、観る者を楽しませた。

異色の壮年の部では、この大会のキーマンである富永大会委員長（自衛隊連盟理事長）自らが、46歳とも思えぬハッスルプレーで大会を盛り上げたのが印象的であった。

＜男子選手権の部＞

▽1回戦

呉（海・広島）27（13－9、14－11）20 下総（海・千葉）

所沢防衛医大（共同・埼玉）12（6－0、6－0）0 宇都宮4施群（陸・栃木）

習志野1空挺団（陸・千葉）24（9－8、15－7）15 三宿中央病院（陸海空・東京）

神町（陸・山形）12（6－0、6－0）0 岩手（陸・岩手）

北熊本（陸・熊本）24（16－7、8－1）8 東立川（陸・東京）

▽2回戦

呉 18（2－0、2－1、10－6、4－8）15 勝田（陸・茨城）

習志野1空挺団 22（11－9、11－7）16 所沢防衛医大

古河1施大（陸・茨城）12（6－0、6－0）0 神町

北熊本 24（16－13、8－9）22 久里浜（陸・神奈川）

▽準決勝

呉 32（17－6、15－2）8 習志野1空挺団

北熊本 20（11－11、9－7）18 古河1施大

▽決勝

呉 33（17－8、16－7）15 北熊本

＜少年の部＞

熊谷生徒隊 20（11－11、9－5）16 武山少年工科学校

武山少年工科学校 20（10－9、10－5）14 江田島1術校生徒部

熊谷生徒隊 28（15－9、13－6）15 江田島1術校生徒部

＜女子の部＞

三宿中央病院 11（5－3、6－4）7 市ケ谷ワック隊

＜壮年の部＞

古河勝田OB 12（6－6、6－5）11 久里浜武上OB

昭和57年度関東学生秋季リーグ戦

日大（男子）東女体大（女子）が優勝

昭和57年度関東学生秋季リーグ戦は、男子が1部から6部、女子が1、2部で、9月23日から10月24日まで約1カ月にわたって熱戦をくり広げた。

男子1部は、安定した力を発揮した日大が春につづいて優勝、女子1部は東女体大が日体大、筑波大をせり合いの末退け優勝を飾った。

入れ替え戦は、11月2、3日の両日行なわれ、男子6部の和光大関東学院大、5部の創価大、武蔵工大がそれぞれ昇格した。

総評

学連委員長　宮沢　良光

＜男子1部＞

春季リーグ優勝の日大、東日本学生優勝の筑波大、パワーの日体大の三強、それを追う国士大、中大、早大と見られていたが、国士大、中大のチームワークに日体大、筑波大が苦しめられ、日体大は中盤で2敗、筑波大も国士大と引き分けてしまった。

中盤で2敗した日体大は優勝の望みを絶たれたが、意地を見せて筑波大に快勝、5試合を終了した時点で全勝は日大、1分が筑波大、1敗1分が国士大、中大と日体大が2敗という混戦となった。

結局、日大は全勝で優勝、パワーとチームワークで2敗を守った中大が2位、3位は国士大、4位筑波大となった。

今季リーグをふり返ってみると、期待された筑波大、日体大が低迷し、逆に中大、国士大などのチームワークにまとまりのあるチームが台頭して来た。また、ディフェンスの力のあるチームが上位を占めている。パワーのチームには、やはり松ヤニの禁止がひびいたのではないか。

日大は、実力、チームワークともずば抜けていた。優勝の最短距離にいたのはやはり日大であった。中大、国士大の台頭は目をみはるものがあり、インカレでは注目されるチームである。

日体大、筑波大のこれからの奮起を望みたい。

＜女子1部＞

前評判通り、日体大、筑波大、東女体大の争いとなった。

日体大、筑波大とも途中で負傷者が出てベストメンバーでなかったこともあり、全体的にリズムがなく単調な攻撃であった。ディフェンスも関連がなくミスが目立った。東女体大はメンバーに変動がなく一段とまとまりのあるチームに育ち、また、個人個人も順調に伸びて来た2年生の成長が著しく優勝への大きな原動力となった。

日体大、筑波大はそれぞれの良さをある程度まで発揮したものの、攻撃、ディフェンスとも東女体大の方がチームワークの面で一歩上のようであった。インカレでの日体大、筑波大の仕上りを期待したい。

東京学芸大が今季リーグ元気がなく最下位となったが、東京学芸大に敗れなかった茨城大の成長にも目を見張るものがある。

＜男子1部＞

▽9月23日

中央大　30（18－12　12－5）17　早稲田大

筑波大　20（11－11　9－9）20　国士大

日体大　28（15－13　13－8）21　法政大

日本大　32（13－12　19－8）20　慶応大

▽9月25日

日本大　35（19－11　16－8）19　法政大

日体大　24（14－10　10－5）15　慶応大

国士大　27（18－8　9－7）15　早稲田大

筑波大 26（13－16／13－9）25 中央大

▽10月8日
中央大 22（9－10／13－10）20 日体大
日本大 22（13－12／9－4）16 国士大
法政大 26（16－11／16－13）24 早稲田大
筑波大 26（10－8／16－8）16 慶応大

▽10月9日
早稲田大 25（15－9／10－8）17 慶応大
国士大 22（8－5／14－9）14 日体大
日本大 28（14－13／14－12）25 中央大
筑波大 26（13－7／13－10）17 法政大

▽10月16日
国士大 22（14－6／8－12）18 法政大
中央大 32（19－12／13－7）19 慶応大
日体大 19（10－8／9－10）18 筑波大
日本大 23（10－10／13－7）17 早稲田大

▽10月22日
国士大 33（20－6／13－4）10 慶応大
中央大 26（10－15／16－8）23 法政大
日体大 27（15－10／12－13）23 早稲田大
日本大 20（10－9／10－6）15 筑波大

▽10月23日
法政大 31（17－8／14－6）14 慶応大
中央大 23（11－10／12－6）16 国士大
筑波大 24（13－6／11－10）16 早稲田大
日本大 23（15－8／8－9）17 日体大

〔順位〕①日本大（7勝）②中央大（5勝2敗）③国士大（4勝2敗1分）④筑波大（4勝2敗1分）⑤日体大（4勝3敗）⑥法政大（2勝5敗）⑦早稲田大（1勝6敗）⑧慶応大（7敗）

▽優秀選手
GK 森田佳光（日本大）
FP 矢内浩（国士大）
永井雅己（日本大）
伊藤治也（日本大）
菅沼保幸（日本大）
田口隆（日本大）
中川英二（中央大）

▽得点王
池田勝（国士大）53点

＜男子2部＞

▽9月23日
東京大 17－14 明星大

▽9月25日
上智大 22－22 東海大

▽9月26日
上智大 21－14 東京大
順天大 23－21 茨城大

▽9月28日
東京学芸大 27－24 順天大

▽10月2日
東京学芸大 24－19 茨城大

▽10月3日
東京学芸大 24－19 明星大

▽10月9日
順天大 21－16 上智大

▽10月10日
東京学芸大 25－25 横浜国大

▽10月11日
東京学芸大 20－19 上智大
順天大 18－15 東京大
東海大 26－11 横浜国大

▽10月15日
横浜国大 20－17 上智大
東海大 31－19 明星大

▽10月16日
東海大 26－23 東京学芸大
横浜国大 22－21 明星大

▽10月17日
順天大 27－27 横浜国大
茨城大 20－19 東海大
上智大 15－14 明星大
東京学芸大 27－26 東京大

▽10月19日
茨城大 24－17 横浜国大
東海大 25－16 東京大

▽10月20日
上智大 13－13 茨城大

▽10月21日
順天大 24－20 東海大
茨城大 21－15 明星大
東京大 30－23 横浜国大

▽10月22日
東京大 21－14 茨城大

▽10月23日
順天大 20－16 明星大

〔順位〕①順天大②東京学芸大③東海大④茨城大⑤東京大⑥上智大⑦横浜国大⑧明星大

＜男子3部＞

▽9月25日
明治大 19－16 立教大

▽9月28日
神奈川大 17－13 立教大
明治大 21－17 東京理科大
芝浦工大 28－21 防衛大
大東文化大 19－19 専修大

▽10月2日
専修大 30－13 立教大

▽10月10日
防衛大 30－28 神奈川大

▽10月13日
芝浦工大 26－16 東京理科大
専修大 27－16 明治大

▽10月16日
芝浦工大 22－17 立教大
専修大 32－17 東京理科大
明治大 35－22 神奈川大
防衛大 23－11 大東文化大

▽10月19日
東京理科大 35－20 立教大
明治大 28－20 防衛大
芝浦工大 25－21 専修大
大東文化大 24－23 神奈川大

▽10月20日
明治大 26－20 芝浦工大
大東文化大 28－20 東京理科大
専修大 31－16 神奈川大
立教大 15－12 防衛大

〔順位〕①芝浦工大②専修大③明治大④大東文化大⑤東京理科大⑥防衛大⑦立教大⑧神奈川大

＜男子4部＞

▽9月28日
文教大 19－8 東京経済大

▽10月3日
東京農大 27－17 千葉工大

▽10月10日
千葉工大 21－19 一橋大
横浜商科大 20－15 埼玉大

▽10月14日
一橋大 21－19 青山学院大

青山学院大 35－24 横浜商科大

▽10月15日
埼玉大 25－23 青山学院大

▽10月16日
横浜商科大 30－20 東京経済大
文教大 32－13 青山学院大
一橋大 25－17 埼玉大

▽10月17日
東京農大 24－23 一橋大
千葉工大 13－10 文教大

▽10月19日
東京農大 31－20 横浜商科大

▽10月20日
一橋大 18－16 東京経済大
文教大 19－19 横浜商科大

▽10月21日
東京農大 20－17 青山学院大
千葉工大 24－21 横浜商科大

▽10月22日
青山学院大 24－18 東京経済大

▽10月23日
一橋大 34－14 横浜商科大
東京農大 30－18 東京経済大
文教大 24－19 埼玉大

▽10月24日
東京農大 18－17 埼玉大
文教大 19－16 一橋大

▽10月26日
千葉工大 26－10 東京経済大
文教大 24－19 東京農大

▽10月27日
千葉工大 24－21 青山学院大

▽10月30日
埼玉大 15－13 千葉工大

〔順位〕①東京農大②文教大③千葉工大④一橋大⑤埼玉大⑥横浜商科大⑦青山学院大⑧東京経済大

＜男子5部＞

▽9月28日
都留文科大 21－16 独協大

▽10月2日
創価大 31－14 日本工大
独協大 20－16 横浜市大
武蔵工大 27－21 武蔵大

▽10月3日
日本工大 29－16 横浜市大
武蔵大 20－16 独協大
武蔵工大 31－11 都留文科大

▽10月9日
武蔵大 26－18 都留文科大
武蔵工大 33－14 独協大

▽10月10日
都留文科大 23－17 東京工大

▽10月11日
創価大 23－18 武蔵大

▽10月13日
創価大 27－19 東京工大

▽10月16日
創価大 23－19 都留文科大
武蔵大 23－17 横浜市大
独協大 13－7 東京工大
武蔵工大 不戦勝 日本工大

▽10月17日
武蔵工大 29－15 東京工大
都留文科大 25－23 日本工大

▽10月19日
創価大 20－17 独協大
日本工大 42－21 武蔵大

▽10月20日
武蔵大 28－17 東京工大
創価大 26－11 武蔵工大
都留文科大 26－15 横浜市大

▽10月23日
日本工大 30－22 独協大
横浜市大 25－21 武蔵工大

▽10月24日
創価大 29－22 横浜市大

▽10月27日
横浜市大 18－15 東京工大

〔順位〕①創価大②武蔵工大③日本工大④武蔵大⑤都留文科大⑥独協大⑦横浜市大⑧東京工大

＜男子6部＞

▽9月28日
千葉大 20－16 和光大
麗沢大 27－14 拓殖大
関東学院大 30－15 東洋大

▽10月2日
和光大 不戦勝 山梨大
千葉大 12－11 成蹊大
亜細亜大 21－15 拓殖大
東京工芸大 11－11 麗沢大

▽10月3日
成蹊大 21－15 明治学院大

▽10月7日
東洋大 21－17 東京農工大

▽10月9日
関東学院大 24－16 東京農工大

▽10月10日
玉川大 24－17 成蹊大

▽10月11日
東京工芸大 不戦勝 拓殖大

▽10月13日
玉川大 23－22 明治学院大
東京外語大 24－16 麗沢大

▽10月14日
都立大 24－23 明治学院大
東京農大 29－19 拓殖大
関東学院大 38－25 東京外語大
東洋大 39－22 東京工芸大

▽10月16日
都立大 16－16 山梨大
明治学院大 18－12 山梨大
玉川大 15－14 千葉大
関東学院大 22－18 亜細亜大
東京農工大 23－15 東京工芸大
東京外語大 27－18 東洋大

▽10月17日
都立大 19－15 千葉大
山梨大 17－16 成蹊大
和光大 19－16 明治学院大
関東学院大 49－25 東京工芸大
東京外語大 25－18 拓殖大
麗沢大 18－11 東京農工大
亜細亜大 20－18 東洋大

▽10月18日
亜細亜大 33－8 東京農工大
和光大 27－19 成蹊大

▽10月19日
都立大 26－17 玉川大
千葉大 23－10 山梨大
亜細亜大 35－10 東京工芸大
東洋大 24－24 拓殖大
東京外語大 43－30 東京農工大
関東学院大 37－21 麗沢大

▽10月20日
玉川大 18－15 和光大
成蹊大 26－15 都立大
明治学院大 18－17 千葉大
関東学院大 38－15 拓殖大
亜細亜大 21－13 麗沢大

▽10月23日
和光大 31－18 都立大

▽10月24日
東洋大 16－13 麗沢大
東京外語大 36－21 東京工芸大

▽順位決定戦
関東学院大 34－20 和光大

〔順位〕①関東学院大②和光大③亜細亜大④玉川大⑤東京外語大⑥都立大⑦東洋大⑧千葉大⑨麗沢大⑩成蹊大⑪東京農工大⑫明治学院大⑬東京工芸大⑭山梨大⑮拓殖大

＜女子1部＞

▽9月23日
東女体大 35（18－8、17－6）14 日女体大
日体大 32（16－2、16－8）10 茨城大
筑波大 20（8－11、12－7）18 東京学芸大

▽9月25日
筑波大 22（12－8、10－8）16 東京学芸大

▽9月26日
東女体大 28（12－7、16－1）8 茨城大
日体大 26（15－5、11－4）9 東京学芸大

▽9月29日
日体大 32（17 15－3 1）4 茨城大
▽10月1日
東女体大 31（15 16－2 6）8 茨城大
▽10月2日
東女体大 26（16 10－4 5）9 日女体大
日体大 39（22 17－3 5）8 東京学芸大
筑波大 26（14 12－5 3）8 茨城大
▽10月3日
筑波大 18（10 8－1 5）6 茨城大
日体大 33（19 14－9 2）11 日女体大
▽10月8日
日体大 24（17 7－9 7）16 日女体大
▽10月9日
筑波大 18（10 8－7 4）11 日女体大
▽10月10日
日体大 14（6 8－8 6）14 東女体大
筑波大 21（12 9－9 7）16 日女体大
▽10月11日
東女体大 17（5 12－4 9）13 日体大
日女体大 20（9 11－9 8）17 東京学芸大
▽10月16日
東女体大 18（8 10－7 11）18 筑波大
日女体大 23（11 12－9 8）17 東京学芸大
▽10月17日
東女体大 20（7 13－6 7）13 筑波大
▽10月19日
日体大 17（9 8－11 6）17 筑波大
日女体大 21（11 10－4 11）15 茨城大
東女体大 28（12 16－2 6）8 東京学芸大
▽10月20日
東京学芸大 19（11 8－10 9）19 茨城大
▽10月21日
茨城大 19（9 10－7 7）14 東京学芸大
▽10月23日
日女体大 20（13 7－13 5）18 茨城大
東女体大 30（17 13－6 9）15 東京学芸大
日体大 13（9 4－5 8）13 筑波大

〔順位〕①東女体大（8勝2分）②日体大（6勝1敗3分）③筑波大（6勝1敗3分）④日女体大（4勝6敗）⑤茨城大（1勝8敗1分）⑥東京学芸大（1勝8敗1分）

〔優秀選手〕
GK 大坪みゆき（東女体大）
FP 増子早苗（東女体大）
鈴木智恵子（東女体大）
田島豊子（東女体大）
国府さわ栞（日体大）
小口智子（日体大）
山口順子（筑波大）

〔得点王〕
鈴木智恵子（東女体大）81点

＜女子2部＞

▽9月28日
文教大 26－3 駒沢大
東海大 32－3 創価大
千葉明徳短大 22－7 都留文科大
千葉明徳短大 21－10 横浜国大
▽10月2日
文教大 20－2 横浜国大
▽10月3日
東海大 23－14 文教大
創価大 17－6 横浜国大
▽10月7日
東海大 53－8 駒沢大
▽10月9日
文教大 24－9 創価大
▽10月10日
駒沢大 27－12 学習院女短大
▽10月11日
文教大 11－4 都留文科大
千葉明徳短大 28－6 創価大
▽10月13日
横浜国大 20－8 駒沢大
▽10月16日
創価大 25－3 学習院女短大
都留文科大 9－8 創価大
千葉明徳短大 22－10 文教大
都留文科大 14－5 駒沢大
▽10月17日
千葉明徳短大 44－0 学習院女短大
▽10月18日
横浜国大 17－5 学習院女短大
▽10月19日
東海大 31－2 横浜国大
文教大 39－2 学習院女短大
都留文科大 18－9 横浜国大
千葉明徳短大 36－4 駒沢大
▽10月20日
都留文科大 19－4 学習院女短大
千葉明徳短大 21－16 東海大
▽10月22日
創価大 27－10 駒沢大
東海大 21－7 都留文科大

〔順位〕①千葉明徳短大②東海大③文教大④都留文科大⑤創価大⑥横浜国大⑦駒沢大⑧学習院女短大

＜入れ替え戦＞

▽11月2日
和光大 29－23 横浜市大
（6部2位）（5部7位）
関東学院大 28－19 東京工大
（6部1位）（5部8位）
武蔵工大 26－16 青山学院大
（5部2位）（4部7位）
創価大 24－17 東京経済大
（5部1位）（4部8位）
▽11月3日
立教大 17－9 文教大
（3部7位）（4部2位）
神奈川大 31－23 東京農大
（3部8位）（4部1位）
東京学芸大 24－21 千葉明徳短大
（女子1部6位）（女子2部1位）
早稲田大 28－21 東京学芸大
（1部7位）（2部2位）
慶応大 16－13 順天大
（1部8位）（2部1位）
横浜国大 19－18 専修大
（2部7位）（3部2位）
明星大 18－15 芝浦工大
（2部8位）（3部1位）

男子

▒優勝　日大

技術・戦術・体力（形態）とすべてにまとまりを見せたチームである。優勝して当然といえる実力である。ハンドボールに対する取り組み方の真面目さは、鈴木監督、新井田コーチをはじめとしたコーチングスタッフの支援によるところが大きいであろう。新部長になられた田中氏もこの優勝の経験をもとに、おそらくハンドボールのとりこになられることであろう。

日大の戦術の特徴は、なんといってもバスケットボール的なセンスをハンドボールに取り入れたところであろう。フローターの間合の取り方などまさにそれで、この戦法は現コーチの新井田氏によってもたらされたものである。新井田氏後、山口(哲)、仲田らによって受けつがれ、強い日大の時代はつづいたが、その後、メンバーの交代もあって二部に落ちるなど低迷していた時期もあった。今年より成長著しい田口が、この戦術を生かせる技術をマスターし、ポイントゲッターとリードオフマンの役目を果せることができるようになったことが大きい。また、レギュラーそれぞれの実力も高く、スキのない布陣であった。

攻撃力もさることながら、防禦力もレベルの高いもので、これが波のないゲームをこなせる原因でもあった。形態的に恵まれ、相手を読む眼も確かで、要所要所を押さえ、シュートを打たれても、GK・森田がよく好守した。シュートを打つ機会をつくるのが精一杯で、最後の要であるGKとの勝負にまで余力を残せるチームは少なかったようである。現在のところ日大の優勝は、当然といえた。

優勝した日大の攻撃（シュートする田口）

2位　中大

昨年まで、スタープレーヤーを揃え、これなら日本リーグに勝ってもおかしくないと思われていた中大も、ほとんどが卒業し、昨年までのレギュラーは実方一人である。しかし、キャプテン中川をはじめとする今年の布陣も、ハイレベルであることには間違いなく、スケールの大きさは落ちるものの個性のある選手を揃えて優勝までもう一歩のところまでいった。

3位　国士館大

GKの矢田を核に、走るハンドボールが国士舘の特徴である。4位の筑波大とはリーグの初戦に引き分けている。4勝2敗1分けの成績は、筑波大と同率であるが、得点点差で3位となった。走るハンドボールは、誰にも出来るハンドボールとして、高校生には、ぜ

〈上〉2位の日体大シュートを防ぐGK高倉，〈下〉3位筑波のリードオフマン山口②

ひ見てもらいたいものである。GK・矢内を相手に日々練習し、磨きをかけているシュート力はかなりのものがあり、特に池田は、高いシュート確率をもつ巧みなシュート力を有している。

4位　筑波大

昨年まで筑波大の西山か、西山の筑波大かわからないほど、西山のシュートの成否に勝敗がかかっていた筑波大であるが、今年は、すっかり戦術を新たにし、中島をリードオフマンとするスピードとコンビネーションの筑波大へと変身した。東日本学生選手権では、最高の動きで優勝した筑波大も、リーグ戦では、もう一つ元気がなかった。形態的に恵まれない選手が多いが、それらの選手がますます活躍することによって、大型化パワー化のハンドボールにも、活路を開いておいて欲しいものである。

5位　日体大

昨年とほぼ同じメンバーで、どのプレーヤーを見ても、高い実力の持主ばかりである。

9月には、ルーマニアへ単独で遠征するなど、万全の準備であったが、ゲームになると勢いに乗ることが出来ず3敗してしまった。

今年の前評判では最強チームと期待されていたが、期待通りの成績を残せないままでいる。

学生の試合では、インカレを残すだけとなってしまったが、まとまれば、優勝する力があるだけに楽しみである。

6位　法政大

高良兄弟をはじめテクニシャンぞろいの法政大であるが、常々たんたんとした試合運びで盛り上がりに欠け、それがチームカラーとなってしまっているような感を受ける。

優秀な選手も多いだけに、一つ殻を破れば上位に食い込むことも可能なチームである。

7位　早大

何故7位なのか不思議なチームが早大である。

早大独特の荒けづりではあるが、パワーとガッツを身につけたチームカラーは相変らずであるが、それだけに終ってしまっている。

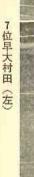
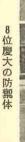
ディフェンス力がつけば相当活躍するはずである。

8位　慶大

慶大の身上は、緻密と粘り、そしてまとまりである。

今年は、早大から転校した平林を加え、大砲のいる慶大となり期待されたが、中心選手をケガで欠くなどにより、個々は頑張るものの勝負出来る段階までいかなかった。

4位筑波リードオフマン・中島

5位日体大⑦は高橋

6位法政・水戸江⑮

7位早大村田（左）

8位慶大の防禦体

女子

■優勝　東京女子体育大

しばらく低迷していた東女体大がようやく復活した。日体、筑波の優勝争いの陰にかくれ、着々と実力を蓄してきたものが、ようやく実を結んだと言える。

秋季リーグは、まさに東女絶好調といえるもので、日体、筑波がモタモタしている間に優勝をさらっていってしまった。東女体のハンドボールの戦術的特徴は、流れるように継続する攻撃にある。無理なシュートはまず打たない。それぞれが役割に忠実で攻撃を止めることはない。最後には、ディフェンスもスキもつくってしまう。

得意とする速攻も同様によくつなぎ確実に得点していく。これからは、日体、筑波に割って入り活躍することであろう。

2位　日体大

一対一を中心とした攻防とGK・高倉の好キーピング、及び監督の藤原氏の采配によってゲームの流れをつくっていくのが日体大である。東日本より中心選手の天野を欠いていることは、下級生の多い日体だけに、十分力を発揮することが出来ないままに終ってしまった。

〈上〉・勝の東女体（シュートするのは小池），右２位日体大の守り，
〈左〉３位筑波山口のシュート

3位　筑波大

個々のプレーヤーの実力からみて、優勝に最も近い位置にいたのが筑波大である。東日本で優勝した状態から、もう一歩前進することが出来ず、なんとなく不協和音のままに終ってしまった。３年生の山口、河原、鈴木、ＧＫ・久保が健在だけに、このまま終わることはないであろう。

4位　日本女子体育大

もう少し頑張って欲しいチームである。まだ、日女体大の象徴といったものがなく、個々の力が発揮されないままに終ってしまっている。

5位　茨城大

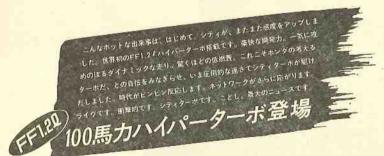
コーチの岡本氏を中心によく頑張っているチームである。水戸からリーグ戦に出てくることは大変なことである。選手の獲得もままならないが、ハンドボールに対する情熱はどのチームにも負けないものが感じられる。

6位　学芸大

小人数で練習している成果であろう。プレーにコンビネーションとキープ力が備わってきた。筑波大学に善戦するなど、活躍が期待されたが最下位で終ってしまった。３番・鈴木のプレーには見るべきものがある。

フットワークはフォーメーションから生まれます。
だれが駆けても、

シティは、スポーツマン。

CITY
TURBO

本田技研工業株式会社鈴鹿製作所

くらし、ひろげるジャスコのカード
ファッションから食品まで
サインひとつでお買物――――。
ご入会手続きも簡単です。お気軽にお申込みください。
会員募集中
お支払いもいろいろ
●月々のお支払いがラクな
リボルビング払い
●手数料なしのおトクな
一回払い
●お求めはいま、お支払いは
ボーナス一括払い
JUSCO CARD
1234-5678A-1234
ジャスコ ハナコ
58・08
ジャスコ花子
●一部地域により取扱っていない
場合もございます。
お申し込み、お問い合せは、ジャスコ各店
サービスカウンター又は、販売員におたず
ねください。
ジャスコ

第19回IHF総会報告

第19回国際ハンドボール連盟通常総会は、去る8月18日、19日の両日、ロンドン（イギリス）において開催された。前号に掲載されたように、我が国からは、荒川専務理事が出席し、議事及び、主たる会議の内容は次の通りであった。

■議事次第

1 開会の辞
2 ハンス・バウマン杯の授与
3 出席点呼
4 会長とともに公式議事録をチェックする人のメンバー指名
5 総会が正しく成立したことの確認
6 一九八〇年総会議事録の承認
7 会長および委員会の報告
8 財政の説明および監査報告
9 会計の承認の投票
10 検討グループの報告とともに提案の審議
11 検討グループのより一層の報告
12 ルール26条の選手選出基準の批准
13 公式IHF選手権大会の義務の範囲
14 活動計画の決定と行事の割当
15 一九八四年ロスアンゼルス第23回オリンピック大会
16 一九八四年第20回IHF総会
17 予算の決定と年次分担金の決定
18 一九八二年から一九八六年のIHF行事カレンダー
19 メンバー表の訂正
20 その他

会長および委員会報告

会長報告

第19回IHF通常総会はまだ公式に開かれてないが、私はここ2年間にハンドボール競技の発展と改善の面において、非常な進歩が世界的にとげられたということを確信を以て言えると思う。

なかでもアメリカ、アジアおよびアメリカ大陸の各大陸協会の程度も格段と改良された。もちろん私共の努力にもかかわらず現時点で解決できない問題や困難は残されている。

しかし全てのIHFの委員会は効果的に選手、コーチ、レフェリーに対する訓練と教育を実施するためにそのベストをつくしている。多くの援助と支援が先進ハンドボール協会とIHFの委員会により真の協力精神を基礎として、目的を達成するためになされねばならないだろう。このような価値のある努力が合理性と相互理解の状況の中で追求され続けられることを望む。

ところで、このロンドンにおける作業総会は各分野ですでに完成された仕事に関し、皆で一緒に検討し討論し将来に向けての道を決定する機会をきっと与えてくれると思う。

ヨーロッパ以外の大陸でのハンドボールの発展を力づけるため必要とされる一層の支援の手段について、合意に達するものと確信する。良いスタートは切られているが、まだそこには大きなギャップがあるということがいえる。

以下の各委員会の報告はここ数年間にどれだけのことがなしとげられたかを示している。私個人としては第10回男子世界選手権大会は、最大の印象を与えてくれたことを見出した。競技規則の改正が直接の大きな成功をもたらしたことを見て驚いた。ハンドボールは見てもまた最も興味のあるものであることが示され、そのことに関し私は参加した各チームおよび正確さと調和の新しい方向を打ち出したレフェリー特別の尊敬を払いたい。

この機会に私は、ここ数年の間に色々のIHF行事を開催していただいた各協会に特別の感謝を申し上げたい。多くの国はそのために払われねばならない努力と経済上の負担の故にこれら重要行事を引き受けることに食欲をそそられなかった。その理由の故に私共は、開催国が示された意欲と自己犠牲に対して大きな負担の下にある。

私はまた、この2年間すばらしい仕事をしていただいた私共のすべての協力者により示された大きな意欲を高く評価する。さらに、加盟国協会、大陸協会、IOC等の国際組織、報道関係者、ラジオテレビ関係の方々にその援助と協力を感謝する。

私は、次の一九八四年総会までIHFという船が良き友情精神の下に航海を続け、嵐や争いや試練を乗り越え、安全に運航を続けることを希望し、信じます。

会長　ポール・ヘグベルグ
一九八二年五月於ストックホルム

■**一九八〇年—一九八二年組織・大会委員会（COC）報告**

一九八〇年モスクワにおける第22回オリンピック大会、一九八二年西ドイツにおける第10回男子世界選手権大会およびB・Cクラスとジュニアの5つの世界選手権大会がこの期間の主たる行事であった。組織面に関しては全てのこれらの行事は完全に遂行された。勿論完全に除去できないいくつかの問題はあったが、全体的にそのバランスは満足すべきものであった。

ジュニア世界選手権大会とアジアの予選においては、しかしながら短い通告で参加を中止するチームがありかなりの困惑と不便を招いた。この種の中止は行事全体に悪い影響を与えたという事実を別にしても、そういうキャンセルは開催国に対し困惑以外の何物をもまねかない。したがって、IHF理事会は違反協会の国際行事参加を禁止するよう決定した。

この関係で再度強調されねばならないことは、多くの協会にとってチームを大会に派遣することが

ますます困難になりつつあるということである。距離の遠さ、および支払わねばならない宿泊、食事代金はこれらの協会に非常に大きい財務上の負担を課している。加うるに多くの行事に関して開催者を見出すことがほとんど不可能になってきている。このような理由からCOCは再度総会参加者全てに緊急アピールを再度出し、新しい大会を導入することによって、これ以上すでに実施の決まっている大会の他に更に負担をかけないよう求めている。

一九七四年IHF総会で、ヨーロッパにBおよびC世界選手権大会を、またジュニア世界選手権大会を導入することを決めて、行事計画を拡大することが圧倒的多数で可決されたことを記憶されていることだろう。このことは前へ向っての大きなステップであり、またそれまで予選にしか現われなかった国のハンドボールの発展に少なからざる影響を与えた。

しかしすでに承認されたこのような方向に対して最近試合手続を変更するよう求める声が起っている。

このような色々の大会の増加によって、1つのチームがこのようなエレベーターシステムにつかまり、身体的および財政的な大きな負担に困惑することがしばしばある。このようなきつい場合が多いので、大会実施方法を変更して、現在の2年毎に代って4年毎にのみ各チームは本大会出場資格を得ることができるようにするという問題が提起され、ジュニア世界選手権大会を4年毎に開催することにするかどうかという問題が今回討論の対象とされている。

この報告の対象期間（一九八〇〜一九八二年）の行事に戻れば、一九八〇年モスクワオリンピック大会と一九八二年西ドイツでの男子世界選手権大会が最も重要な行事であった。この行事の中でオリンピック大会でプレーした男・女選手は、近年にない質の良いものであったが、それにしても、第10回男子世界選手権大会で示したプレーヤーの技術や戦術は素晴らしかった。大会運営の面では初めて採用した12チームによる決勝ラウンド方式は、改正されたルールと共に成功であったことが証明された。

フラスンにおける男子、デンマークにおける女子のB世界選手権大会はまたトップクラスに値する大会であったし、参加したチーム全てに良い経験を与え、ベルギーにおけるC世界選手権大会は美しく組織運営され、高く評価された大会であった。

ポルトガルでの第3回男子ジュニア世界選手権大会は、ハンドボールの有効な宣伝の一手段であることが証明された。各プレーヤーの到達された高い技術水準は、各国共ジュニアのためのすぐれた技術、トレーニング体制が確立していることを明確に示した。画期的なことは、IHFの歴史において初めて世界選手権大会がヨーロッパの外で開催されたことである。カナダがこの女子ジュニアの大会を開催し、適切にアレンジされたことを証明した。しかし、不幸にもいくつかの強いヨーロッパチームが参加しなかったし、またアフリカ代表チームも不参加だった。

ヨーロッパカップ大会は相変らず興味深かった。この大会は第3の大会（IHFカップ）の創設により増えた。一一八チームが多くの興奮とドラマ、オドロキさえも与えた。アフリカ、アジア、汎アメリカ大陸における定着リスト（加盟リスト）はどんどん増え続けている。特記すべきことは、アジア大会へのハンドボールの採用は大きな成功であり、これによってアジアのハンドボール界は大きく飛躍することであろう。また南アメリカの諸国におけるハンドボールも大きな発展をとげた。

近い将来に目を向けると、一九八二年十二月にハンガリーにおいて第8回女子世界選手権大会が行われ、12チームが参加する。一九八三年二月十三日のオランダにおける男子B世界選手権大会の準備は進んでいる。ロスアンゼルスでの一九八四年オリンピック大会に関しては組織委と密接な協力関係が保たれている。両方のサイドからの訪問と討論は非常に成果があり、開催に問題はないことを望めるようにした。

ロンドンでの作業総会では、そこでの討論がハンドボールの将来に明るい光をもたらすよう希望するとともに、再度この委員会のメンバー諸氏の優れた協力に感謝する機会を持ち、さらにIHF事務局のすばらしい仕事と私たちへの援助に感謝を表明いたします。

委員長　クルト・ワドマーク

一九八二年五月　於ルント

■一九八〇年から一九八二年の期間の競技規則・レフェリー委員会（COC）報告

一　委員会

モスコーでのIHF総会の時の選挙および一九八〇年七月総会直後の理事会でPRC委員長とメンバーは次のとおり決った。

委員長　カールE・ワン（ノルウェー）
副委員長　エリク・エリアス（スウェーデン）
委員　ジャニス・グリンベルガヌ（ソ連）
〃　ウェルナー・ヴイック（西ドイツ）
〃　クルト・シューフ（東ドイツ）
〃　テオ・キールホルン（オランダ）

事務局の依頼にもとづきエリク・エリアスがPRC副委員長として指名された。

二　会合

委員会は一九八二年二月西ドイツでの男子A世界選手権大会および一九八一年九月ドイツカメンでのレフェリーコースの時開かれた。特別の会合が一九八〇年十月ザルトボンメル（オランダ）でオランダ協会の招待を受けて開かれた。

三　競技規則およびその解釈に関する仕事

新競技規則を作成する過程と関連づけた新しい作業方法およびシステムに従って理事会は、一九八〇年七月モスクワ総会の前日の会合で草案を承認した。新競技規則は一九八一年八月一日から国際的に有効とされた。PRC委員長は一九八〇年総会でルールの変更とその作業経過を報告した。

競技規則の解釈に関しPRCは、作業グループを通じ40国から百名の参加者のあった一九八一年五月のオーストリア、リンダーブランでの世界競技規則会議に第一次案を提示した。この会議はIHFコーチ、手法委員会と密接な関係を保ちつつ計画し実行された。

PRCはまた、スイスマクリン

ゲンでのトレーナーシンポジウムにおいて委員長とヴェルナー・ヴィックが出席し、参加者に一九八一年競技規則の基本と詳細を紹介した。

IHF理事会は、一九八一年十一月初めフランスのランダースハイムでの会合でリンダーブラウン会議の後実践を経て出された解釈に関する文書の基本を高く評価した。

一般的に新ルールに関する評価は肯定的でより速く、興味がもてるとともに、何よりもキレイでスポーツ的な競技の将来の発展を約束するものであった。

色々の加盟協会からの報告もすべて肯定的なものであった。

四　レフェリーの仕事

①公式講習会、カテガリーBレフェリー講習会

○ヨーロッパ
・一九八一年九月於スウェーデン
・ルント　北部諸国対象
・一九八一年十二月於オランダ・ジッタード　ドイツ語国対象
・一九八二年六月於ルーマニア・ポイナブラソワ　フランス語国対象

○アジア
・一九八一年十一月於クウェート
・一九八二年五月於ソウル

○アフリカ
・一九八一年十二月於エジプト・カイロ

②　非公式講習会（レフェリーズ・クリニック）
於クウェート、インド、日本、スペイン、アイスランド、カナダ

③　トップレフェリー講習会（一九八二年男子A世界選手権大会の準備とトレーニングとして）
於ドイツ・カメン　一九八一年九月

④　ミニレフェリー講習会が全てのIHF大会の前にPRCの代表により開かれた。

⑤　システマティック（組織的）な観察サービス
新しいIHFのレフェリー観察様式にもとづき、全ての試合は試合後のレフェリーとの評価に関する対話および観察シートへの経験の記入との関連において原則として観察される。

⑥　国際レフェリーカテゴリーAおよびB（候補者）一九八〇／八一年リストおよび一九八一／八二年リストを完成した。加盟各国協会が組織的に国際レフェリーを補充し、またすでに承認されている国際レフェリーを訓練する仕事を援助するための努力が続けられた。

⑦　全ての公式IHF試合に国際レフェリーを指名した。

⑧　PKC講師
世界中のレフェリーの教育の仕事を幅広くし力強くするために、一九八一／一九八二年シーズンの始まる前にPRC講師となる指名に応募するよう各国に招待が出され、15名程の講師が受け入れられた。しかし現在までこのシステムは充分活用されていない。

⑨　加盟各国協会におけるレフェリー関係の仕事を発展させることと関係した仕事を分割可能にするため、PRCのメンバーはできるだけ加盟国協会と密接な関係を保つために、PRCメンバーをパトロンとしての責任を持たせるようにした。

五　結論

IHFの他の技術委員会および加盟各国協会との密接な協力関係を通じて、一九八一年新競技規則はその解釈とともに活動に入った。

加盟各国協会は、一九八五年版競技規則の新しい編集に向けて新しい変更のアイデアや考えがあればよく検討されるよう依頼します。この件に関する最初の討論は、一九八二年IHF総会の時に始められる。

一九八二年から一九八四年までの次のIHF作業期間には全加盟国のレフェリーの新規の養成と教育計画を発展させることにポイントが置かれる。

PRCは期間中に示された協力に感謝いたします。

一九八二年四月於　モスクワ

IHF／PRC委員長　カール・E・ワン

●コーチおよび手法委員会報告―一九八〇年／一九八二年

この期間中のCCMの仕事の中心は一九八一年五月十七日から二十二日までスイスのマグリンゲンで開かれたトレーナーシンポジウムにあった。33カ国協会から82名のトレーナーが参加したこのシンポジウムの主な目的は一九八〇年オリンピックハンドボール大会の評価を作成することであった。どの主題に関しても2カ国語での翻訳があったので出席者は提示された素材から自分自身の結論を引き出すことができた。CCM委員長は自分の仕事の都合で最後の部分は欠席せざるをえなかったが、大量の情報が出席代表に与えられた。2、3の批判を除いて、講議とグループ研修の評価は一般的フィーリングとして良かった。そのよってきたるところは、この講習会のリーダーハインツ・サイラーと彼のチームによる優れた講習会運営にある。

世界選抜は、I・クレスト・ゲルマネスクとI・スノシュ指導の下に一九八〇年十一月2回行われた。ハンガリー、ユーゴスラヴィア、ルーマニア、スイス、ソ連、西ドイツ、ポーランドから選手が選ばれた。けがをした西ドイツの選手ジョ・デッカームのためにドルトムントで慈善試合一試合とスウェーデン協会創立50周年を祝ってスウェーデンチームとゲーテボルグで一試合が行われた。

その後、CCMのすすめによりルーマニアのラデュ・ボイナが選手サイドからソ連のアナトル・エブッチエンコがトレーナーサイドから、一九八一年九月に西ドイツバーデンバーデンで行なわれた第11回オリンピック総会に出席した。

一方、委員長イオン・クンスト・ゲルマネスクはCCMを代表して世界大会の準備のトップレフェリー講習会に講師として参加し、ハインツ・ザイラーはCPCとCCMの連絡役をした。この期間中CCMは、いろいろのトレーニングコースやオリンピックソリダリティのためCCMメンバーや講師を派遣した。

一九八二年五月

IHF専務　ペップマイヤー

一九八〇／一九八二年医事委員会報告

一九八〇年IHF総会において理事会は、医事委員会の委員の数を実践上の理由から増やすべきだとの結論に達した。医事委員会は現在次のメンバーにより構成されている。

委員長　イストバン・マダラッツ（ハンガリー）
委員　チノ・ヘス博士(スイス)
〃　ジリ・ジェチック博士（チェコスロバキア）
〃　ウルスラ・ミードリッヒ博士(東ドイツ)
〃　ワルター・パラマー博士（オーストリア）

医事委員会はこの期間に2回の会合を行った。一つはスイス、マグリンゲンでの一九八一年五月のトレーナーシンポジウスの時に、もう一つは一九八二年三月五日西ドイツでの男子世界選手権大会の時に行われた。

一九八〇／八二年の期間に医事委員会は次の重要課題を討論し、計画し、実行した。

一、スペインでの男子B世界選手権大会、西ドイツでの男子A世界選手権大会、デンマークでの女子B世界選手権大会におけるドーピングチェック。

得られた結果から見て、医事委員会はこのような大会の開催国協会にこれらチェックに関するより一層の援助を与えることが必要であると考える。IHF行事におけるドーピングチェックの技術上の勧告要旨が編集された。

二、禁止される薬品の公式リストがチェックされ、IOCの線に従いアナボリック・ステロイドが追加された。

三、大陸協会との接触が行なわれ、基本的事項についての実践上の目的を伝達した。

四、IHFの代表としてジェチック博士はイタリアのビテルボでのIFMCシンポジウムに出席し、スポーツ薬品の討議を行い、パラマー博士はオーストリア・ウイーンの別の会合に出席した。

五、第10回男子世界選手権大会の時一九八二年五月五日ドルトムントにおいて第3回会合が行われ、スポーツ薬品に関する情報と経験が交換された。次のテーマが取扱われた。

――ハンドボール試合中の新陳代謝の変更　G・ハラランビ博士（西ドイツ）
――練習および試合中における力の回復　ジェチック博士（チェコスロバキア）
――現在ハンドボールの医事問題の討議　ヘス博士（スイス）

六、委員会はマグリンゲンのスポーツ薬品研究所を訪問し、所長のホワルド博士の案内を受けた。

七、スポーツ薬品の専門家エイク・アンドレン・サンドベルグ博士（スウェーデン）がハンドボール世界選手権大会中の選手の傷害の分析を行った。彼がその結果をまとめた医事委員会はその検討を行いその結果を編集した。

八、一九八一年十二月ハンガリーでの女子A世界選手権大会の時医事委員会は、その大会に参加していたチームドクターと共に、ブタペストにある体育スポーツ教育研究所のスポーツ薬品部を訪問した。

医事委員会委員長
イストバン・マダラッツ
ブタペスト、一九八二年五月

●一九八〇／一九八二広報・普及委員会報告

CPDは一九八〇年モスクワ総会で次のとおり選ばれた。

委員長　ハインツ・ザイラー（東ドイツ）
委員　セイド・ブーアムラ（アルジェリア）
〃　ペーター・ブク（ユーゴスラビア）
〃　イヴァン・カスパー（チェコスロヴァキア）
〃　ハンスマックス・ケスラー（スイス）
〃　フリッツ・ウイジュク（オランダ）

この総会の直後次の4年間のためのハンドボールの一層の発展を目的とした、特にこの観点から未発達の大陸を中心とした地域での発展を主たる目的とした。もう一つの緊急のCPDの課題は、低いレベルのコーチとレフェリーを訓練する講習会を作ることと戦術、戦略を図入りで示しルールを解説する図書を作ることであった。この目的のために専門家としてウエルナー・ヴィックおよびハインツ・シュッターがPRCとCCMから協力メンバーとして指名された。

今日まで企てられた活動の結果は非常に積極的であったとみなすことができる。一九八一年五月十日にウイーンでまた一九八二年四月十五日バーゼルで開かれた2回の会合では、実行された計画が評価されるとともに具体的成果が生み出された。その主なものは次のとおりである。

一、ドイツ語、英語、フランス語のハンドボールのポスターが用意され、ロンドンでの総会で配布することができる。スペイン語版も作られ、まもなく使える。

二、レフェリーのトレーニングのための図入り指導書シリーズが完成され、4カ国語に訳された。トレーナーのための講習会が行われ、必要なテキストが作られた。それを翻訳の上印刷することができる。この2つのシリーズものは一九八二年八月に使えるようになる。

三、トレーナーの基礎的教育のための「教育モデルコース」のプランに従ったテキストの案が完成された。それでは理論および実践面での指導上の問題およびルール7、8、17条の説明を取扱っている。

四、違ったレベルのレフェリーを統合してコーチし、義的務なIHFの指導書を提供する教育のモデルコースを作るため一層のプランが作られている。

五、「IHFハンドボール初歩」の出版は大いに進んでいる。いくつかの案がすでに作られた。初版は約30ページになり、カラーで印刷されている。その中には競技の精神、基本的なルールおよびプレー方法のいくつかの例が含まれている。しかしそれは決してテキストブックではない。それには絵とスケッチが入っており、使用者が容易に理解できるようになっている。

六、上記諸計画の取扱った後、CPD（普及発展委員会）は、トレーニング方法およびレフェリーとトレーナーへのルールの適用について視覚にうったえて教えるためビデオを作ることを考えている。この目的のために適切なフィルムとビデオテープが獲得されねばならない。そしてもしそれらがIHF所有のものでないならば、その所有者に許可が求められねばならない。同時にIHFは全てのフィルム、ビデオ、文書類言語に従って分類したカタログを作り、その供給者と価格を示すよう企画している。

CPDはまたスポンサー問題に再度取り組んでいる。その計画はまだ予期した成果を上げていな

い。協会の全ての適去の活動を集めるという企画はまだ有効な成果を上げていない。しかし、それにもかかわらずヨーロッパ諸国は自国の政府およびオリンピック委がハンドボールにより多くかかわれるように確立した。最後にCPDのメンバーと他のIHF委員会にその優れた御協力を感謝いたします。またIHF事務局にその援助と支持を感謝いたします。

CPD委員長　ハインツ・ザイラー

東独・ベルリン一九八二年　五月

■会計報告

本年の男子A世界選手権が終った後、その大会は「すばらしい世界選手権大会」であったことに全員が同意した。この年度の収支決算についても誇張なしに同様であったと言える。予想されなかった状況により、今日まで夢にしかすぎなかった結果に我々は到達した。いろいろの最上の収益が一九八二年総会に64万8千スイスフラン（8千9百万円）の剰余金を計上することになった。

予算と対比した時莫大な差が出たことを容易に説明でき、また損益計算書によりそれを説明する理由を見出すことができる。以下が追加分の収入である。

①一九八〇年オリンピック大会
24万5千スイスフラン

②一九八二年男子世界選手権大会
11万5千スイスフラン

③一九八一／八二年ヨーロッパカップ　13万スイスフラン

④長期供託金中間利息
4万5千スイスフラン

⑤ボール契約
2万スイスフラン

⑥年会費
2万スイスフラン

合計　57万5千スイスフラン

簡単な調査上では全ての運営管理面で経費は経済的に操作され、その結果IHFにとっては、歴史上初めて利益が百万スイスフラン（1億2千5百万円）を超えた。

このことは我々協会の責務の広がりと遂行、年々拡大する経済的規模を考えた時、この喜ばしい財務上の発展はこの上なくこのましいものである。振り返れば10年前IHFが改革されたわく組みでスタートした時、そこには財務上の保証はなかったものが、この10年間の間に発展的解消を遂げ、今我々は財務的にも健全であると言える。なお以下に数字のデーターと関係すをコメントを提出します。

一九八二年六月

会計　A・フレヅランド・ペダーセン

専務　フリードリッヒ・ベップマイヤー

ユーゴスラビアにコーチ学研究

世界の頂点を目ざす強豪の練習法を考える——

島村　漠

ユーゴスラビアハンドボールの概要

近年、東欧スポーツ勢の活躍が各スポーツ部門において世界を魅了し始めている。なかでもユーゴスラビア国のサッカー、バスケットボールを初めとして各球技スポーツの活躍が著しい。また西欧のスポーツ界では東欧諸国の一流選手やコーチを招きスポーツの発展と技術の向上を計っている。

ユーゴスラビアハンドボール関係者にいたっては現在、西ドイツ国にブラドミル・シュテンツル氏を初めとして5～6人のユーゴハンドボーラーやコーチがコート上で活躍している。

私は今回、ユーゴスラビアハンドボールに興味を持ち単身、ハンドボールコーチ学を勉強するため、約一年半ユーゴスラビアの首都ベオグラードに滞在するにいたった。私費留学の研究生という名目でツルベズダ（赤い星）というベオグラードで最大きくまた各スポーツチームを有しているチームに在籍した。

ツルベナズベズダは全国一部リーグに属しているチームでユーゴハンドボールのトレーニングやコーチングのレベルが高く、それ故、私にとって有意義であり、大いに研究にあたることが出来た。

ユーゴハンドボールの全体的な組織としては、総競技人口が約10万人であり、中心はやはり全国一部リーグチームである。この全国一部リーグのチーム数は、男子14チーム、女子12チームである。またその下には全国一部Bリーグがある。Bリーグは南と西に分れ南地リーグ男女共に14チームで西地区リーグは男女共12チームで構成されている。

また、その下にいたっては、共和国リーグ、町リーグと続いてチーム数は各男女共に12から14の構成である。

大会の中心はユーゴ国内リーグでありリーグは前後期と分かれて行なわれる。リーグやその他のトーナメント大会の試合日は土日水曜日と決めてあり、水曜日はおもに国際大会（ヨーロッパ選手権）予選や国内トーナメント大会を行なう。（大会がない時は、練習試合を行なう）。試合開始時間は普通夜の7時からである。

リーグは前後期が約6カ月で消化するが、他の大会はそのリーグ期間内で開かれる形である。

練習は試合日をのぞけば週五日制であり全国一部リーグに属するチーム全体が同じである。

ツルベナルベズダの毎日の練習時間は約2時間で午後の五時から7時までが一般的である。

日によっては時間帯がずれることもあった。

しかし日本の実業団チームと変わらない練習時間帯であった。

このチームの選手数は約50名くらいで、これにはジュニア・少年クラスの選手も含んでいる。少年クラスの選手は、一般クラスの選手と共に練習することはなく、月に一度の合同練習の時だけ参加する。

少年クラスの年齢は日本の中・高等学校選手にあたる。しかし、優秀な選手であればジュニア一般クラスでプレーすることが出来、試合にも出場することが出来る。ツルベナスベズダにも2人の少年クラスの選手が一般クラスに参加していた。

女子選手も同様でユーゴスラビアには、スベトラナキティチという天才少女がいる。彼女は、ベオグラードにあるラドゥニチキというクラブチームに所属してプレーしているのだが、彼女は14才で同クラブのレギュラーになり、15才でユーゴスラビアナショナルチームに属し、現在は23才にして世界のトッププレーヤーである。今、彼女は出産準備にあるようで今回、ハンガリーで開かれる第7回女子世界選手権に出場することが出来ないようであるのが残念である。

ツルベナズベズダの一般クラスの選手の中の約9割は学生であった。

チームの平均年齢は約23才ぐらいで、30才のフェイズラ・ペトゥリチが最年長であった。彼は今回、ドイツで開かれた第10回世界選手権にポストプレーヤーで出場したが、ユーゴスラビアナショナルチームの中でも最年長者であった。彼はベオグラードのある工場でエンジニアとして働いている。

3人のコーチとの出会い

ツルベナズベスダのコーチ（監督）は私の在籍中に3人変わった。いろいろな理由で交代したのだが、3人とも、一流のコーチであった。

最初に出会ったコーチは、ジョルジュ・ブチニチ氏で彼は、過去に何度もヨーロッパクラブ選手権にコーチとして出場していた。現在は、シャバツにあるメタロプラスチカのコーチをしている。

ユーゴの練習風景

2人目は、プラニスラブ・ポクラヤツ氏で、現在は若くしてユーゴスラビアナショナル・チームのコーチである。3人目は現在、引き続きツルベナズベズダのコーチをしているミハイロ・オブラノビチ氏である。

3人のコーチニングには、すべて特色のあるものであった。

面白いことにまずジョルジュ氏は、守りを重視するタイプで、ポクラヤツ氏は全体の調和をそして、ミハイロ氏は、攻撃を重視するコーチングを行なっていた。

彼らの特色を言及するならば、ジョルジュ氏の考えはゴールキーパーとディフェンスを中心として、勝利を得ようとするものであった。

彼の指揮する試合は、一般の試合より得点が少なく接戦が多く見られ、勝利の数が少なかったようである。

ポクラヤツ氏の考えは、全体的な組織プレーを中心に、試合の中でいかに有効的なプレーを行ない、また、試合の流れにそって勝利を得ようとするものである。

そしてミハイロ氏は、ディフェンスを中心として高得点で勝利を導びく戦術を重視していた。

全体的に彼らに共通する点は、すべて完全な計画性を持ったコーチングを行なうことであった。

まず一年の計画を立て、それから前後期の計画であり、1ケ月、1週間の計画、そしてその日の計画といったように、すべてカリキュラムにそった練習を行なう。

また、これは約1週間のサイクルであるが、毎日の練習に同一練習体形を行なわないことである。

たとえば、柔軟や筋肉トレーニングの練習の例をとれば、第1日目は徒手体操的なものであり、2日目は機械体操的に補助具（ナワ跳び、メディシンボール）を使い、3日目は、バーベルや飛び箱、またベンチのイスといったように、ひとつの目的にいろいろな方法で同一の用途の効果をもとめる形である。

これは、その他オフェンスやディフェンスの戦術練習にもそのような方法をもちいている。これには、一人々の選手の練習に対する慣れを防ぐ目的と毎日の新しい練習によって選手の緊張を維持する目的があるようである。

ウェイトトレーニングとインターバル練習

ユーゴスラビアのリーグ開催期間は、前期9月中頃から12月中頃まで、そして後期は、2月中頃から5月中頃までの約6ケ月間にまたがって行なわれる。

前期前の夏休みには、合宿で海や山の方へでかけ基礎体力トレーニングを中心に、約3週間ほど行なうのが普通のようである。

後期前にいたってはウェイトトレーニングを中心に約1ケ月ほど練習が行なわれる。この期間中にはハンドボールをあまり使わない。

トレーニング機械や、メディシンボールを使った練習の後にバスケットボールやサッカーなどのゲームを行ない躰をほぐしている。また、メディシンボールを使ったラクビーの変形ゲームなどで、単なる遊びという中にも計画された練習法もあった。

日本でのハンドボールウィンター練習に見られるような、走り込みのロードワーク的なものはあまり見られなかった。

「彼らは、ハンドボールには、一定のリズムで走ることがない」というように、常にインターバル的に走っている。

ウェイトトレーニングで体力を備え、インターバル的練習で瞬間的スピードを養うという2つの組み合せから、ハンドボールに必要なスタミナを養っている。

私はこのウェイトトレーニング期間中、4、5回練習に参加して見たが、練習終了した時、あまり疲れを感じなかった。

実際にはウェイトトレーニングやインターバル的練習は、ハードトレーニングのはずであるのに、選手に疲れを感じさせない練習法を行なうコーチングに感心した。

しかし、時として選手が疲れを感じた場合、その時は個人の意志により、練習からぬけることがある。このような時、指導するコーチはその選手の意志にまかせている。

実際その選手は自分自身の限界まで行なっている。そして疲れが回復すればまた、練習に参加するのである。

コーチは、疲れている者に強制的練習を行なっても無意味であるということを徹底している。

日本的根性論などまったくない。

個別化の練習

現在ユーゴスラビア・ナショナルチーム・コーチのポクラヤツ氏

による練習法のなかに、実戦的(6対6)な練習から各部分的な骨組を個別的な形に移行して、練習する方法が多く見られた。

たとえば攻撃　習において、センターや両45度の選手とサイドの選手の組み合わせの展開、あるいは、ポストの選手とセンター・両45度の選手の組み合わせの展開といったように、個々別々に練習をする。

このような練習法を全習法と分習法に分けて考えるならば、分習法に近い形である。

全習法とは、いろいろな説明や示範などの手段を利用しながら、全体的な活動、またはまとまりのある構成単位を提示する方法であり、注意や修正する必要がでてきた場合には、普通、何回か区切をつけてそれを行なうようにする。また分習法においては、まず技能の系列をつくることを目的として、基本的な活動について完全な分析を行なうことから始められる。

その際の系列は単純なものから始まり、しだい複雑なものへと進められる。これらは、選手に個々の経験として与えられ、ある程度それらが習得されと、今度は結合され全体的な活動へと統合する。

日本の練習においてもこの分習法が多く見られる。

しかし、ポクラヤツ氏による練習法の中から2つの異なりを見ることが出来る。

第一にカリキュラムにそった長期的な計画であり、日本で行なうような短期的な計画での、毎日の反復練習ではない。第2、プレーヤーの専門化という問題から各選手のポジションの設定による分習法である。たとえば、3対3の練習においてもかならず各選手個人のポジションを考えて3人の構成を計っている。

各選手のポジションの専門化

一九七〇年、フランスにおいて開催された第7回男子世界選手権で、チェコスロバキアの選手が行なったサイドプレーヤーによるサイドの領域での専門化プレーによる失敗の原因には、狭い専門化プレーによった限定にあった。すなわち、一般性による動きに欠けた、完全な専門化にあったといわれる。

しかし、その後のサイドプレーヤーによる専門化について新たな考えとして、一般性と専門性を兼ね備えた選手あるいは、そのチームにおいて、おのおの2つの型の選手を備えておく必要があるといわれる。

しかし、今日では専門化の考えが拡大して各ポジションにまでおよんでいる。

西ドイツにおいて開催された第10回男子選手権で、ユーゴスラビアのチームのポストプレーヤーであるフェイズラが見せたように完全なポストプレーヤーの専門化が進み、今後はセンター・両45度の選手の専門化が進むと予想される。

ハンドボールの攻撃によるポジションを大きく分けると、センターと両度サイド・ポストの3つとなる。これらの専門性を試合の流れから各働きの要因の分析により計ることが出来る。

その分析の要因のなかで、最も中心となる働きの要因を専門化し、その他の働きを一般性の中に入れて練習を行なう。

一般性と専門化について言及すれば、一般性とは、ハンドボールプレーの基本動作を各ポジションにおいて平均的なプレーで行なうことを意味する。

専門化とは、各ポジションにおいてその専門家(エキスパート)を意味する。

この一般性と専門化の練習は分けて行なわれる。

選手の個別化練習に合わせ専門化の練習を行なう。また一般性の練習は全体的な練習や個人練習のなかで習得される。

また、このような専門化は、非常に個別化練習と深い関係を保っていると思われる。

なぜなら、各ポジションの選手の役割は、個別化した練習の中で幅広く求めることが出来、全体のバランスを保つことが出来る要素を持つからである。

一般的な練習からでは、各ポジションの役割が狭くなる。

青色のユニホーム

私はツルベナズベズダの選手の練習に対する態度から「子は親を見て育つ」ということわざを思った。練習の中にあって常に先頭に立つのはレギラー選手であり、その中でもナショナル選手やキャプテンである。そしてナショナル選手にある人は、ベテランといわれる年齢にあっても後輩の後に追随することは絶対にない。

彼らには、自分はプラビ(意味としては、ユーゴ・ナショナルチームのユニホームの色が青色であるところからそういわれると呼ばれる)愛称を誇りに思い、そして自分は、模範生であるといったような気持が強いようである。

近年は、ソ連を始め、東欧諸国が世界をリードしているが、この諸国の実力の差は縮まって来ている。その中にあってユーゴスラビアハンドボールは今後、良く分析されたトレーニングと指導者のコーチングにおいて、近い将来、世界の頂点に達する日が来ると思われる。

ストップ&ジャンプ自在。

グリップ力抜群のニューソール装備、新製品〈スカイハンドスペシャル〉

アシックスタイガーの新製品 スカイハンドスペシャル はストップ&ジャンプが自在にできるハンドボール専用シューズです。
写真の底意匠にご注目ください。複雑なトレッド(溝)をソール全面に刻み込んでいます。これは、ハンドボール特有の、多角的な動きに対応するためで、とくに拇指球下のリング状意匠はグリップ力を飛躍的に高めます。このため、選手は思うようにストップでき、また思うようにジャンプすることができます。
●甲被はステア表革と銀付ベロアの2タイプ。●独創のカップソールは甲被を食わえ込む設計で、足ブレを防ぎます。●大型ヒールカウンターはカカトをガッチリ保持し、選手の動作能力を高めます。
●軽さ、クッション性も卓越。
ストップ&ジャンプの スカイハンドスペシャル で栄光をつかんでください。

asics TIGER®
Handball Shoes

スカイハンド®スペシャル

NEW

スカイハンド スペシャル(THH705)
●甲被はステア表革(ホワイト)、銀付ベロア(レッド、ロイヤルブルー)、裏地はナイロン。●アウターソールはラバーのカップソール。●ロイヤルブルー×ホワイト、ホワイト×レッド、レッド×ホワイト。●サイズ 22.5~28.0cm
標準小売価格 ¥12,000

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第二一三号
昭和四十年六[illegible]日
第三種郵便物認可
昭和五七年十月二十五日 印刷
昭和五七年十一月 一 日 発行
[illegible]都渋谷区神南一－一－一
代表(467)七〇九七
東京 六－五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
定価三百五拾円
(年間購読料三千三百円)